

ふるさと瑞穂から

私の八色石物語

上田 松子 旧姓 宇津田（八色石）

現役時代、転勤、転宅を繰り返した我家の最終勤務地は、今年俄に脚光を浴びたあのニュートリノ実験施設のある岐阜県神岡町である。実家の父から「八色石に格好の物件がある。早急に返事せよ」という突然の連絡を受けたのは、その神岡に住んで八年目の夏の終わりのことであつた。すでにその頃、定年後の第二の人生は、生まれ故郷である島根にしたいと夢は描いていたものの、主人が石見町出身であるためまさか瑞穂町に住むことなど考えてもいなかった。

入手するまでに、手続きなどで紆余曲折があつたものの二〇〇一年三月には登記完了、同年八月、この八色石に居を構えた。

周囲は山と田んぼに囲まれ、昔と全く変わり無い残したい日本の風景がそのまま広がっている美しい山里である。寺山修二の言であつたか「二〇年な

にもしない価値」が、ここには残っていた。「私の八色石物語」のスタートである。

我家の周辺は誠に自然が豊かである。春から秋にかけて次々に咲く野の花は実に清楚で愛らしい。六月初旬の蛍の大群にも仰天した。一瞬、小川は「蛍の川」に変身する。思いがけないこれら自然の恩恵を、大切に守っていかなければと思う瞬間でもある。

今、私が大切に、生活の一部となつてゐるのは、野草を活かせることである。長靴を履き朝露を踏みながら周囲の草花を摘み取ってくる。それを思いっきり好きな物に活けるのだ。大きな甕や壺、時には古い民具の場合もある。この喜びは都会では味わえないと、一人田舎（さと）暮らしをほくそえむ時でもある。

里山暮らしは結構忙しい。とにかく周囲にはびこる旺盛な草には参ってしまう。草刈機の

扱いは、この地に暮らす必須条件と心得るべし。恐る恐るではあるが、その扱いにも多少は慣れてきた。虎刈りではあつても草刈後の爽快感はなんともいえない。猪や鳥との戦いも凄まじい。現在は負けつつけであるが、「いつか応酬の日を」とひそかに策を練っている。

自然のほかに、故郷の人情はさらに嬉しい。何十年も離れ、かつての黒髪は黒白混色に変じているにもかかわらず「まっちゃん？」と声をかけていたばかり事が度々有る。私はもうすっかり忘れていた懐かしい人達である。

集落の方々の受け入れ方も有り難い。突き放すでもなく、かといつて干渉するのでもない。ときには古漬け菜や取れたての野菜が玄関先に置いてある事もある。

環境のよさと便利さとは相反するものがあり、時には不便を感じることもあるが、こんな生活にも少しずつ順応しつつある昨今である。

老い先に、一抹の不安を感じないわけでもないが、恵み多い里山の暮らしを大切に、ゆっくりに八色石の風に吹かれてみたい。

関西瑞穂会会報
第二八号（平成一四年発行）に請われて
投稿したものです。